

ゲーテの「ファウスト」について

中 原 義 浩

ゲーテの「ファウスト」には献辞が添えられている。だがこれは一般のその様に特定の人に捧げられているものではなく、作品の成立にあたって直接それにあづかった人々、間接的にその完成をうながしてくれた人々、恋人や友人や要するにこれまでのゲーテの生涯にあって彼を動かした全ての人々に対する献辞であり、結局は過去の総体としての彼自身への献辞にほかならないのである。そしてゲーテが「ファウスト」の完成にあたってこの様な献辞を書かないでおれなかったこと自体が、実はこの作品が彼自身の体験そのものより生れたものであり、それを人生の総決算として告白した作品であるということを裏書きしている。今一つこのことを示す事実として、この献辞が1797年から1806年までの「ファウスト第1部」の完成にあたって付せられたものであること——「ファウスト」に関してはすでに1773年から1775年にかけて「ファウスト初稿」がしたためられており、ついで1788年から1790年に渡り、その改訂と2・3の場の書き足しによって「ファウスト断片」が成立し、更に上述の献辞を含めこれまでのほぼ同量にあたる書き足しによって全体的統一がはかられて、ここに「ファウスト第1部」の完成を見るに至ったのである。しかもそれはあくまでも第1部である。彼の人生はこれで終わったのではなく、今後なお30年近く、彼の生涯の約 $\frac{1}{3}$ が残されていたのである。そしてそれが「ファウスト第2部」となって1825年より1831年にかけて実を結び、翌1832年彼はその長い生涯をとじる。

この様にゲーテが彼の生涯をかけ、その総決算として彼の体験を告白した作品「ファウスト」はどの様に読まれるべきであろう。告白とは自分はこの様に生きて来たと他人の前に身をさらすことであり、自分はこのような思想をいだいて、この様に行為した人間であることを示して、他人にその答を求めるものである。そして告白はその人の心から生れて来たものである以上、他人の心を深奥から動かすことが出来るものであり、他人の心の中に入りこみ、その人の中に生きることの出来るものだ。その意味で告白こそ人間の遺し得る最大の遺産ともいえよう。そしてこの遺産を受けつぐためには、心からこれに答えなければならない。それも「自分はこれこれだ」とその人の告白を聞いた以上、真底からこれに答えるとすれば、答える方もまた「私はしかじか

だ」というほかないであろう。この彼と私との直接的交流こそが最も肝要なことであり、彼の告白を告白として生かす道なのである。しかも「ファウスト」に於てはそれが生涯を通じて行われる以上、真にそれに答えるとすればこれまた一生の問題として絶えず答えつづけなければならないであろう。そしてこの告白する彼にしる答える私にしる、そうするだけの価値があるとすれば、それはこの最も個別的なものが、どれ程人々の心を捕えうるか、つまりどれ程の普遍性を有するかにかかっている。いうまでもなくゲーテは、その時をとわず所をとわず人々の心の中に入りこみ、であればこそ永遠の人、世界の人として称えられている。一方これに答える私の方は？ その価値は？ その普遍性は？ 勿論これを決定するのは他人である以上、私はただ座して待つのみである。にもかかわらず私が敢えて答えるのは、その私は少くとも私自身に対しては妥当性を有しており、それなりの立派な価値があるからである。



いやはや俺は哲学に、
法学，医学，それにまた
むだ骨折って神学までも
一生けんめい研究した。
所がこうしてこの俺は
相変らずの愚かさだ。
Habe nun, ach ! Philosophie,
Juristerei und Medizin,
Und leider auch Theologie
Durchaus studiert, mit heißem Bemühn.
Da steh' ich nun, ich armer Tor,
Und bin so klug als wie zuvor !

(354～359行)

悲劇の幕が上るやいなや、ファウスト博士の口をついて出てくるこの言葉は、いきなり問題の所在を照らす。

中世ヨーロッパの大学の各学部を形成していたのが哲学，法学，医学，神学の4学部であり、そのいづれを追究してみても、ファウストは結局何も知りえなかったのだ。なるほど知識そのものは増したが、人間が生きるということ、人生の意味については何も得るところがなかったのだ。しかしこのことは何も学問そのものの否定にはならない、人間のあくなき探究心を放棄することにはならない。ただそうして求められた

真理・学問が人間に働きかける力をもたない時、それはいたづらなものとなる。

中世的学問をもってしては、もはや人生をとらえることができないのを知ったファウストは、そこで新しい認識の方法として魔法——近代自然科学の方法——にすべてをたくす。今や彼の前からは、人間も自然もすべてが信仰のヴェールにつつまれて、その心はひたすら神に捧げられ、その目はただ天上へ、彼岸へ、来世へと向けられていた世界が消えて、目をしっかりと現世に、此岸に、この地上に向け、この大地に、この太陽に、この自然に心をよせて、その中にこそ喜びも悲しみも生れる世界が開られ行く。

あの世のことなど気にやむことはない。

この世がこなごなに打ち砕かれたら

そのあとはどんな世が生れてこようと勝手だ。

この大地から俺のよろこびは湧く、

この太陽が俺のなやみを輝らすのだ。

Das Drüben kann mich wenig kümmern;

Schlägst du erst diese Welt zu Trümmern,

Die andre mag darnach entstehn.

Aus dieser Erde quillen meine Freuden,

Und diese Sonne scheint meinen Leiden;

(1660～1664行)

我々を取りまいている自然、そして我々もまたこの自然の中に自然の1員として生きている事実——自然と人間の客観的実在としてのこの素朴な直接的な承認が作品「ファウスト」を、従ってまたゲーテを解く重要な鍵となっている。

ともあれこの新しい認識に於ては、もはや思考を思考し、いたづらに言葉を掻きまわす必要はない。ファウストは魔法をもって直接自然の中へとびこむ。彼はノストラダムスの神秘の書を開いて大宇宙の符を見る。そこには大自然の壮観なパノラマが展開される。万物は一つ一つが自己の存在を主張し、たがいに反撥し統合しあって、変化し、発展し、たえまなく生成して行く。しかもそれらは1個の全体を織りなして調和した世界をつくり上げている。ただこの限りなく生成する自然の認識も、認識それ自身としては素晴らしいが、それはあくまでも生成の過程のうちに姿を見せた現象にすぎないのである。それだけでは生きる人間の心をみたしてはくれぬ。

何んと素晴らしい眺めだ。ああ——だが、眺めるだけのことか。

はてしない自然よ、お前はどこを捕えたらよいのだ。

Welch Schauspiel ! Aber ach ! ein Schauspiel nur !

Wo fass' ich dich, unendliche Natur ?

(454～455行)

この大自然の奥底にひそむもの、現象の中にかくされているもの、それを生成へと働きかけ、統一へと導いているもの——ファウストの熾烈な探究心はこの自然の原理をあくまでも把握しようとする。彼は地霊 (Erdgeist) を呼び出した、が彼は地霊を前にして身をふるわせる。地霊は一喝のもとに彼を投げ返してしまった。

お前はお前の考えている霊に似ているだけだ。

俺にはちっとも似ていない。

Du gleichst dem Geist, den du greifst,

Nicht mir ! (512～513行)

自からを神に似たもの (das Ebenbild der Gottheit) と信じ、自己の中に一切の可能性を有していると信じ、自然の原理を把握して自然の創造にあづかり、自然の中に神々の生活をたのしむことが出来ると信じていたファウストは、地霊のこの一喝によって人間の限界を思い知らされた。人間は人間の認識を超えたものがあるということを知らねばならない。神が人間の姿をしているのは、人間が神の高みにまで近づいているのではなくて、神が人間の所にまで降りて来ているだけである。神は人間を含めたあらゆる自然の中であって、その無限をこの有限なるものの中に示めすだけである。所詮人間は人間にしかすぎない。

ファウストはこの事実に向き合っても、気も狂わんばかりの絶望におそわれた。絶望が彼の存在そのものを激しく揺さぶった。しかしこれがそのまま死を求めなければならない理由とはならない、いかにそれが願わしいものであっても。否、むしろこの事実が彼を新しい認識へ、真の認識へ導びくべきであった。人間は人間である、自然の1員として自然の中に生きているものだ。彼がさきに大宇宙の符を見て、限りなく生成する自然の認識を得たとき、「ああ——だが、眺めるだけのものか。」と歎くのは、彼もまた自然の1員として生きていることを見逃したからである。認識する彼もまた生成する自然であるならば、その認識もまた自然とともに生成するものでなければならない。彼は人間であるからには、その認識を人間自身の生成の中に、つまり人間として生きることの中に、一步一步確かめて行かねばならないのだ。ここに新しい認識の道が開ける。認識が単なる認識を脱して、人間の行為を通しての認識、実践の認識、認識の実践がはじまる——いや、はじまる筈であった。

では何故ファウストは生きる自分に気付かなかったのであろうか。彼は皮肉にもひ

たすら生を求めて、かびとほこりの研究室にとじこもっていた。それは人間社会からの隔離であった。人間が人間として真に生きることが出来るのは、実は人間の中にあっただけのことである。これについてメフィストは——ファウストが死を思いとどまった後ではあるが——彼を新しい人生へ引き出すはげみとして次の様にいっている。

はげ鷹のように貴方の生命を啄む煩悶を

もて遊ぶのはおやめなさい。

どんなつまらぬ連中とでもつき合ってみれば分ります、

貴方も人間と一緒にいてこそ人間であるということが。

Hör auf, mit deinem Gram zu spielen,

Der, wie ein Geier, dir am Leben frißt;

Die schlechteste Gesellschaft läßt dich fühlen,

Daß du ein Mensch mit Menschen bist.

(1635～1638行)

ともあれ研究室にとじこもっていたファウストの生命は、その孤独の故にすでにむしばまれつつあり、生の実感を得るにはあまりにも息苦しい室の空気であった。

絶望に突き落され、孤独にさいなまれて、ファウストの目はおのづと毒杯にそそがれる。彼は杯に手をのばして口にあてる。この時である——復活祭をつげる鐘の音と合唱が清らかに彼の心の奥底までしみ渡った。彼は杯を口からはなしてしまう。もはや信仰をもたぬファウストはキリストの復活に救いをもとめたのではなかった。復活祭にまつわる子供の頃のたのしい思い出が彼を再び人生へよび戻したのだ。復活祭には自然は苛酷な冬のいましめから解きほどこかれ、いろとりどりの衣を着て春を生きはじめる。子供はこの中にあって無邪気に遊びまわる。子供の無邪気さは疑いをもたない、従ってはっきりした自覚もない。が子供には分っている、肌でもってぢかに感じとっている——人は自然の中に自然とともに生きるのだということを。

思い出が子供のような感情で

俺を最後の厳粛な一歩から引きとめてくれた。

美しい歌声よ、空いっぱいひびき渡るがよい。

涙がとめどなく溢れる、大地は再び俺をとりもどした。

Erinnrung hält mich nun mit kindlichem Gefühle

Vom letzten, ernsten Schritt zurück.

O tönet fort, ihr süßen Himmelslieder!

Die Träne quillt, die Erde hat mich wieder!

ゲーテの「ファウスト」について

(781～784行)

自然によって生きることを教えられたファウストは、もはや人間の限界に絶望することはない。人間に究められないものはただ静かに敬うばかりだ。そしてこのことを胸にひめながら、あとは自己を限りに生きぬくのだ。

はじめに行為ありき。

Im Anfang war die Tat !

(1237行)

新約の言葉はこの様に訳さなければならない。今や行為の世界が彼をまっている。認識が実践を求めている。そして自然がその偉大な教師だ。ゲーテが「顎間骨論」、「植物変態論」、「色彩論」をはじめとする比較解剖学、植物学、鉱物学、地質学、色彩学などの諸論文と、その科学的実験に要した時間と労力は、散文を含めた詩作全部のそれ以上のものであったろうといわれている。

自然はたえず変化し、発展し、生成をとげてより以上のものへと自己を更新している。そしてその根底に介在しているが矛盾である。互いに矛盾し合う状況にあって、そのものの存在は明白となり、そして自己の存在を主張せんとすれば、必然的に他者との間に葛藤が生れ、変化へ、発展へと生成をうながして自己の更新を見る。しかもこの個別的な生成を通して一つの統一ある全体が形成される。人間の場合にも同様である。ただこの場合、愛と憎み、幸と不幸、喜びと悲しみ、快楽と苦悩、明るい理性と暗い衝動、自由と束縛、その他さまざまな矛盾を通してなされる行為というものが全体的、社会的視野から善と悪の問題としてクローズ・アップされる。善とは個性をのばし、より以上のものに向ってたえず努力・向上し、全体との統一を保って調和した世界をきづこうとする力であり、悪とはこれに逆らう力、否定によって調和をやぶり、安逸と停滞から結局は自己を失うに至らせる力である。

ファウストが行為の世界へ足をふみ入れた途端にメフィストが出現するのは当然であり、そして彼がメフィストと手を結ぶのもまた必然の成り行きである。がメフィストが主ととりかわし、或はファウストととりかわす賭けはそれ自体ナンセンスであり、勝負は最初からついているのである。生成するためには悪を欠くことは出来ぬ。悪にも存在する権利がある。主はメフィストにむかっていっている。

人間の活動はえてして緩みがちになり、

すぐにも人間は絶対的な休息に身を置きたがる。

だから私はつねったりつづいたりして、

悪魔の役を果さなければならない仲間を与えておくのだ。

Des Menschen Tätigkeit kann allzuleicht erschlaffen,
Er liebt sich bald die unbedingte Ruh;
Drum geb' ich gern ihm den Gessellen zu,
Der reizt und wirkt und muß als Teufel schaffen.

(340~343行)

しかしながらこの悪の権利も絶対的なものではない。悪がいかにか否定にせい出しても無になってしまうものではない。結果は新しいものの誕生をうながすだけだ。メフィスト自身自己を告白している。

つねに悪を欲して
つねに善をなす力の一部です。

Ein Teil von jener Kraft,
Die stets das Böse will und stets das Gute schafft.

(1335~1336行)

そしてファウストがもち出した契約の条件は何んであったか。

俺が瞬間にむかって、
「まあ待て、お前はじつに美しい。」
と叫んだら君は俺をしばり上げるがよい。
俺はよろこんで破滅しよう。
Werd' ich zum Augenblicke sagen :
Verweile doch! du bist so schön !
Dann magst du mich in Fesseln schlagen,
Dann will ich gern zugrunde gehn !

(1699~1702行)

生成にむかってのたゆまない努力、これが人間の本質なのだ。時には暗い衝動にかられて、自己の拡大が全体の調和をみだすこともあろう。憂いに捕われて行為がにぶることもあろう。が結局は正しい道を見失うことはないのである。さあ出発だ、行為の世界へ、グレートヒェンの住む私的生活の中へ、そしてまた国王やヘレナの住む公的生活の中へ。ファウストの門出に祝福を送ろう。

ファウスト さあ、どこへ出かけるのだ。
メフィスト どこへでもお好きな所に。
まず小世界を、それから大世界を見ましょう。
Faust. Wohin soll es nun gehn ?

Mephisto. Wohin es dir gefällt.

Wir shen die kleine, dann die große Welt.

(2051~2053行)



ゲーテが信仰の世界から自然をとり戻した時、その自然とはどのようなものであったか。

1. 自然は我々の五官をもって直接認識しうる客観的存在である。ここに自然の物質性がある。
2. 自然には我々の究めることの出来ないものがあって、それが自然に内在して自然に働きかける。ここに自然の霊的な力——精神性がある。
3. 自然はこの矛盾した二つの性質によって、たえず生成をつづける。ここに自然の進展性がある。

この自然のもつ霊的な力を一方的に拡大してしまった宗教や観念論に抗して、ゲーテは自然の中に帰ったが、同時に自然の物質性のみを拡大した唯物論からも身をひるがえすのである。

ふり返って我々をとりまく世界はどうであろう。自然科学の巨大な発展が、20世紀の我々に文化という名の社会を作り出した。市街地には高層建築がたちならび、郊外には近代的大工場が煙りをはき、団地と呼ばれる1群の白い壁が点在する。海岸には防波堤がつき出し、山谷にはダムが築かれ、道は舗装されて山を越え、各種の車が充満する。牛や馬は動物園にとじこめられ、昆虫はデパートの標本箱に眠る。ひとたび家の中に入れば、文化生活の三種の神器とまでうたわれたテレビ、洗濯機、冷蔵庫がデンと腰を下している。やがては実際の月世界旅行がテレビにも写し出されよう。これはまさに技術と機械による人類発展の輝かしい勝利である。がその反面、この技術と機械から生れた文化なるものは自然のもつ霊的な力——精神性——にヴェールをかけた物質の世界である。技術は我々のまわりに、人間の息のかかった物質をならべたてる。ここに人間万能主義と人間の物質化が生じ、やがて人間の尊厳は失はれ、人間軽視が現われる。そして機械は規格品の大量生産によって人間の個性をうばい、機械自身が人間の行為を代行することによって人間を受動的反応へとかりたて、人間から自主性をとり上げる。この危機に立って我々がその克服をはかるには、かつてゲーテが信仰の世界から自然をとり戻した様に、いま我々には物質の世界から自然をとり戻すことが必要なのである。

世界の物質化の中に立たされた我々に、結局は同じ根から生じたものだが、いま一

つの危機がひかえている。ゲーテは観念化された信仰の世界からののがれて自然の中に立った時、来世から現世へと目を向ける。ここに現在という時点が非常な重みをもって来る。過去から未来へと無限に生成する自然は有限なる現在のその瞬間、瞬間に自己を実現するからである。それ程重大な現在も決して過去や未来と手を切っているわけではない。むしろ現在の中にこそ過去と未来がになわれているのだ。だが物質はその固定性の故に我々を現在に縛りつけようとする。ここに過去と未来から断絶した刹那主義が芽生え、その時々々の快樂主義がはばをきかす。努力よりも怠惰が力を得て、探究心も消えて行く。現状にあまじたさやかな幸福の中への逃避が行われる。この様な事態から抜け出すためには、ゲーテが自然をとり戻すことによって現在に目を向けたように、我々は自然をとり戻すことによって未来へ目を向けなければならないのだ。

「ファウスト」の研究を通しゲーテによって示された知恵に、久しく忘れられていた感謝の気持がこの胸によみがえってくる。

出来上ってしまった人間は何事にも満足しないが、

出来かかっている人間にはいつも感謝の心がある。

Wer fertig ist, dem ist nichts recht zu machen,

Ein Werdender wird immer dankbar sein.

(182～183行)

努力する意欲を失い、生成することを止めた人の心に再び感謝の気持が湧いて来たとすれば、それはその人の心に、より以上のものを求めて自から生成せんとする努力が目ざめたことであり、たえずこれに鞭あててまたもや眠りにさそわれることのないよう願うのみである。

(本 学 講 師)